

令和7年度

小金井平和の日記念行事

「平和作文集」

小金井市

はじめに

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を3年ごとに行っています。昭和28年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年12月20日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和35年10月3日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和57年4月1日には、世界で唯一の核被爆国として、また、平和憲法の本質からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和54年3月20日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「平和行事参加の旅」、「非核平和横断幕」、「原爆パネル展」、「非核平和映画会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成26年12月18日に戦後70年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの応募作の中から4編を選定し、文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていいただければ幸いです。

令和8年3月

企画財政部広報秘書課

目 次

○小金井平和の日記念行事作文コンクール

【入賞作文】

小学生の部 大賞

「平和について考えたこと」

増田 貫汰（小金井第二小学校 3年生）・・・・・・・・・・ 1

小学生の部 優秀賞

「私の中にある平和と戦争」

平山 和花（本町小学校 4年生）・・・・・・・・・・ 3

中学生の部 大賞

「今を生きているということ」

波多野 早夏（東中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 6

中学生の部 優秀賞

「平和な世界を」

永澤 友埜（東中学校 3年生）・・・・・・・・・・ 8

小学生の部 大賞

「平和について考えたこと」

増田 貫汰（小金井第二小学校 3年生）

国語じてんで「平和」という言葉の意味を調べたら、「せんそうやあらそいがなく、おだやかにおさまっていること。」と書いてありました。ぼくは日本がずっと昔から平和な国だと思っていました。だから、平和についてあまり考えたことがありませんでした。しかし、3月の全校朝会で校長先生から80年前の3月10日に東京にたくさんのばくだんが落とされて、たくさんの人が死んだことを聞いて、日本が昔、せんそうをしていたことをはじめて知りました。昔のせんそうについてもっと知りたいと思って、夏休みの間に本を読んだりテレビを見たりしました。それで、80年前の8月に広島と長さきに原子ばくだんが落とされたことを知りました。とてもおどろいたし、悲しかったです。原ばくが落とされたあと、日本はせんそうをやめました。外国にはまだせんそうをしている国があります。何も悪いことをしていない子どもたちが死んでしまったり、食べものがなくて苦しんだりしていることは本当に悲しいです。毎日、世界のどこかでせんそうのせいで苦しんでいる人がいるのに、ぼくたちは平和な世界を作れるのでしょうか。

ぼくたちには、本やニュースで知ったことをだれかにつたえる力があります。去年の12月、広しまと長さきに落とされた原ばくのひがいにあった人たちのだん体が、ノーベル平和しょうをとったことを本で知りました。このだん体の中には高校生もいるそうです。せんそうをけいけんしていない人たちが、ひがいしゃたちの思いをつたえていくことはすばらしいと思います。ぼくは今年、せんそうについて知りました。だから、ぼくも日本でせんそうのひがいにあった人たちの思いをつたえていくことができます。そのために、もっとたくさんの本を読んでせんそうのことを学びたいです。

「人間だけがか去のまちがいやしっぱいから学ぶことができる動物だ。」とお母さんから聞きました。か去はかえられませんが、み来はかえていけ

ます。平和な世界を作るために、今、世界で起きているせんそうやあらゆる目に向けて、本やテレビで知った昔の人の強いねがいをみ来につなげていきたいです。

小学生の部 優秀賞

「私の中にある平和と戦争」

平山 和花（本町小学校 4年生）

私にとっての平和は、ただ戦争がないことではありません。ケンカをしてもお互いに話し合い、あやまって、最後にはまた笑い合えることが平和だと思います。私は友達に大事なランドセルを叩かれたことがありました。とてもいやな気持ちになったけれど、どうしてそんなことをしたのか話し合いました。相手も気持ちを話してくれて、私は叩かれたことを許しました。今では普通に仲の良い友達に戻ることができました。その時、「分かり合おうとすることが平和につながるんだ」と気づきました。

また、弟との思い出でも、平和について考えさせられることがありました。私は悪いことをしていないのに、弟が「お姉ちゃんがやった」と親に言いつけたことがあります。私はびっくりして悲しくなりました。けれど親が「何があったの？」と聞いてくれた時、弟は、自分が悪かったと気づいたのか、「ごめんね」と言ってくれました。そして最後には「やっぱりお姉ちゃんが好き」と言って、ぎゅと抱きしめてきました。そのしゅん間、私の心はふわっと柔らかくなりました。人は間違えることもあるけれど、あやまったりだきしめたりして気持ちを通じ合わせることで、また仲良くなれるのだと思いました。これも私が感じた「小さな平和」です。

そんな私が映画「火垂るの墓」を見た時、戦争中の子ともたちのすがたはとても心に残りました。食べ物もなく、毎日おなかをすかせて生きているのは本当にかわいそうでした。私は毎日おやつや夕ごはんを楽しみにしています。もしも、その楽しみがなくなったら…考えるだけで辛くなります。だから今こうして当たり前のように食べ物があることは、実はすごく幸せなことなのだと強く感じました。

映画の中で特に印しょうに残ったのは、兄が妹を大切に思っていたことです。自分も辛いのに、妹を優先して食べ物をあげたり、だっこして守ったりしていました。私なら10日位で体力もなくなり、逃げる事ばかり考えてしまうと思います。でも兄は「生きてほしい」という気持ちで必死に

支えていました。私も弟とケンカをするけれど、やっぱり大事に思う気持ちは同じです。その気持ちが兄弟の絆なんだと思いました。そして「生きているだけでちががある」という言葉が心に深く残りました。

戦争でも人々を元気づけようとする工夫があったことを知りました。当時のざっしに四コマまん画が載っていたり、中村研一さんのモダニズム作品が人々を励まそうとしていたことです。悲しい現実の中で少しでも笑いや希望を届けようとする人達がいたことは、とてもすごいと思いました。

一方で、当時の兵器は今と比べると粗末でしたが、それを使って「国のために」と戦った人たちもいました。しかしその結果、たくさんの方が亡くなりました。1945年8月6日に広島、8月9日には長崎に原子爆弾が投下され、8月15日に終戦をむかえました。でも戦争が終わっても苦しみは終わりませんでした。原爆の後いしょうで白血病などに苦しむ人が多く、祖父母や父母の時代までえいきょうがありました。家族を知らないまま育った人もいて、とても悲しいし、ゆるせない気持ちになります。

私は語り部の方のそんざいを知りました。戦争を体験した人が自分の言葉で語り、そのまま伝えていく活動です。今の私たちは幸せに暮らしているので、戦争の苦しみを本当の意味では想ぞうできない部分があります。その「想ぞうできない」ということが、とてもおそろしい事だと思いました。だから、語り部の活動は、これからも続けていく必要があると強く感じます。

また、今でも沖縄にはアメリカ軍の基地があり、日本人とアメリカ人が共に暮らしています。そこには争いやトラブルもあるそうです。国と国の間で再び同じ悲げきを起こさないためには、「これは二度とくり返してはいけないことだ」という共通の思いを持ち続けなければならないと思います。

学校では地震や震災についてもくとうをしたことがあります。知らない人の苦しみでも心がぎゅっとして涙が出そうになったことを覚えています。戦争のもくとうも大切だと感じます。自分に子どもができた時にも「なぜもくとうをするのか」伝えたいです。

今回学んだことを通して、私は平和とは「戦争がない」だけではなく、友達や弟とすれ違っても気持ちを抱きしめ合う平和と私の名前の中にも平

和という文字があり、両親が「いつも平和な気持ちで生きてほしい」という思いをこめてつけてくれた自分の名前の意味を改めて大切にしていきたいと強く思いました。

中学生の部 大 賞

「今を生きているということ」

波多野 早夏（東中学校 3年生）

私の父の故郷は、京都府舞鶴市だ。私が小学校低学年だった頃、テレビで原爆の映像を見た。父はその時、「お父さんの生まれた舞鶴市は、原爆投下の候補地だったんだよ。」と教えてくれた。まだ幼かった私にはその意味もよくわかっておらず、テレビの中で爆発する原爆も非現実的なものに見えていた。そしてそのまま、父の言葉は忘れてしまった。

その言葉を思いだしたのは、先日授業で石垣りんさんの「挨拶 原爆の写真によせて」を読んだときだった。私はその日家に帰ってから、父が言っていたことを詳しく調べてみた。

パンプキン爆弾というものを知っているだろうか。これは、1945年8月9日、長崎県に落とされた原子爆弾「ファットマン」と同一の形状と重さをもった模擬原爆だ。当時原爆投下の有力候補地だった京都市、広島市、新潟市、小倉市付近を中心に日本各地で落とされたらしい。舞鶴市にもこのパンプキン爆弾が落とされていた。しかも、舞鶴市には大きな軍港があり、日本の海軍の要だったため、空襲などの被害が特に大きかったという。

しかし最終的に、京都府内に原子爆弾は落とされなかった。よく唱えられている説として、京都には世界的な文化財が多くあるので大空襲や爆弾投下はされなかったというものがある。しかし、近年は別の可能性が出てきたらしい。それは、「京都府は原爆投下の最有力候補地だったから」というものだそうだ。京都府に原爆を落とす予定だったから空襲は最小限で、近くに模擬爆弾をたくさん投下してリハーサルをしていたということだ。しかし、京都府に原爆を落とす前にポツダム宣言が受諾され、終戦を迎えた。

私は今までずっと、戦争を自分事として考えられないでいた。これまで、日々ニュースで見る世界の戦争や紛争、第二次世界大戦の資料、原爆の資料など、戦争に関するいろいろなことを見聞きした。それを見れば感

情移入するし、二度と繰り返してはいけないものだということもよく分かる。しかし、私の周りはいつも平和で、友達や家族がいて、衣食住にも困らなくて、死の恐怖なんて感じないで、当たり前前に生きていた。だけど今回、父の言葉から原爆投下の裏側を知って、もし京都府に原爆が落とされていたらと想像したら、間違いなく私はこの世に生まれていなかった。それを理解した途端、急に戦争や、死というものが身近に感じられた。石垣りんさんの「挨拶 原爆の写真によせて」の最後には、「いま在る、あなた
の如く、私の如く、やすらかに、美しく、油断していた」と書かれていた。あの時の人々は、みんな私と同じように生きていて、明るい未来が来ることを疑っていなかった。だけどそれは一瞬で奪われてしまった。スイッチ1つで、同じ人間の手で。広島や長崎の人々だけではなく、今も昔もずっと、戦争ではそれが繰り返されている。

戦争をなくすために私一人の力でできることは本当にごくわずかしかないし、それで世界が変わると思わない。だけどせめて、私の生きている今を生きたくて仕方なかった人たちに恥じないように生きて行こうと思った。

中学生の部 優秀賞

「平和な世界を」

永澤 友埜（東中学校 3年生）

毎日のように目にするニュースの中で、戦争や紛争の映像を見ない日はありません。どこか遠い国での出来事だとしても、画面に映る破壊された建物や泣きじゃくる子どもの姿を見ると、心がぎゅっと締めつけられるような気持ちになります。私は、そのたびに「どうして人は争うのだろう」と考えます。

平和という言葉を聞くと、多くの人には「戦争がない状態」を思い浮かべるかもしれません。でも私は、それだけでは不十分だと思います。誰もが安心して眠れる夜があり、家族と笑い合える食卓があり、将来に希望を持って生きられること。そういった日常こそが、本当の意味での平和ではないでしょうか。私たちの暮らす日本は、戦争のない時代が長く続いています。しかし、世界に目を向ければ、今この瞬間にも、空爆や銃撃に怯えながら暮らしている人々がいます。学校に通えず、家族と離れ離れになり、食べ物すら手に入らない子どもたちもいます。そんな現実があることを、私は知らなかったふりはできません。では、私に何ができるのか。まだ中学生の私にできることなんて、本当に限られているかもしれません。けれども、だからこそ、今の私が思う「平和」を大切にしたいのです。

たとえば、友人とケンカをしてしまったとき、私は相手の言葉にちゃんと耳を傾けようと心がけています。言いたいことを言い合うだけでは、いつまでも分かり合えません。お互いの立場を考え、歩み寄ろうとすることが、関係を修復する第一歩だと思っています。きっと、それは国と国との関係にも通じることではないでしょうか。

ニュースで見たある国の難民キャンプの映像が忘れられません。小さな子どもたちが、布と木だけでできたテントの中で暮らしていました。電気も水もほとんどなく、学校もない。それでも、その子たちは笑顔を見せていました。その姿を見て、私は自分がどれだけ恵まれた環境にいるかを痛感しました。そして、その恵まれた環境に感謝しながら、自分にできるこ

とを探していこうと決めました。

「平和」とは、誰かが与えてくれるものではなく、一人ひとりが築いていくものだと思います。誰かを思いやる気持ち、人の違いを受け入れる姿勢、そして自分だけでなく周りの人の幸せを願う心。そういった小さな気持ちの積み重ねが、大きな平和へとつながっていくと信じています。

私は、将来、世界のどこかで困っている人の役に立てるような仕事に就きたいと思っています。まだ具体的には決まっていますが、国際的な支援活動や教育の分野に関わることができたらと考えています。そのために、今はまず、たくさんのことを学び、多くの人の意見に耳を傾け、自分の考えを深めていきたいです。

「平和」とは、ただ静かなことでも、争いがないことでもありません。人と人との互いを認め合い、支え合って生きていくこと。その中で、一人ひとりが自分らしくいられる社会を作っていくこと。それが、私の思う平和です。世界中のすべての人が、安心して暮らせるように。涙ではなく、笑顔があふれる毎日になるように。私は、今日できる小さな一歩を大切にしながら、平和について考え続けていきたいと思っています。そしていつか平和な世界が実現すると信じて毎日を歩んでいきたいと思っています。

平和作文集

発行 令和8年3月
小金井市

編集 小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
小金井市本町六丁目6番3号
☎042-387-9818